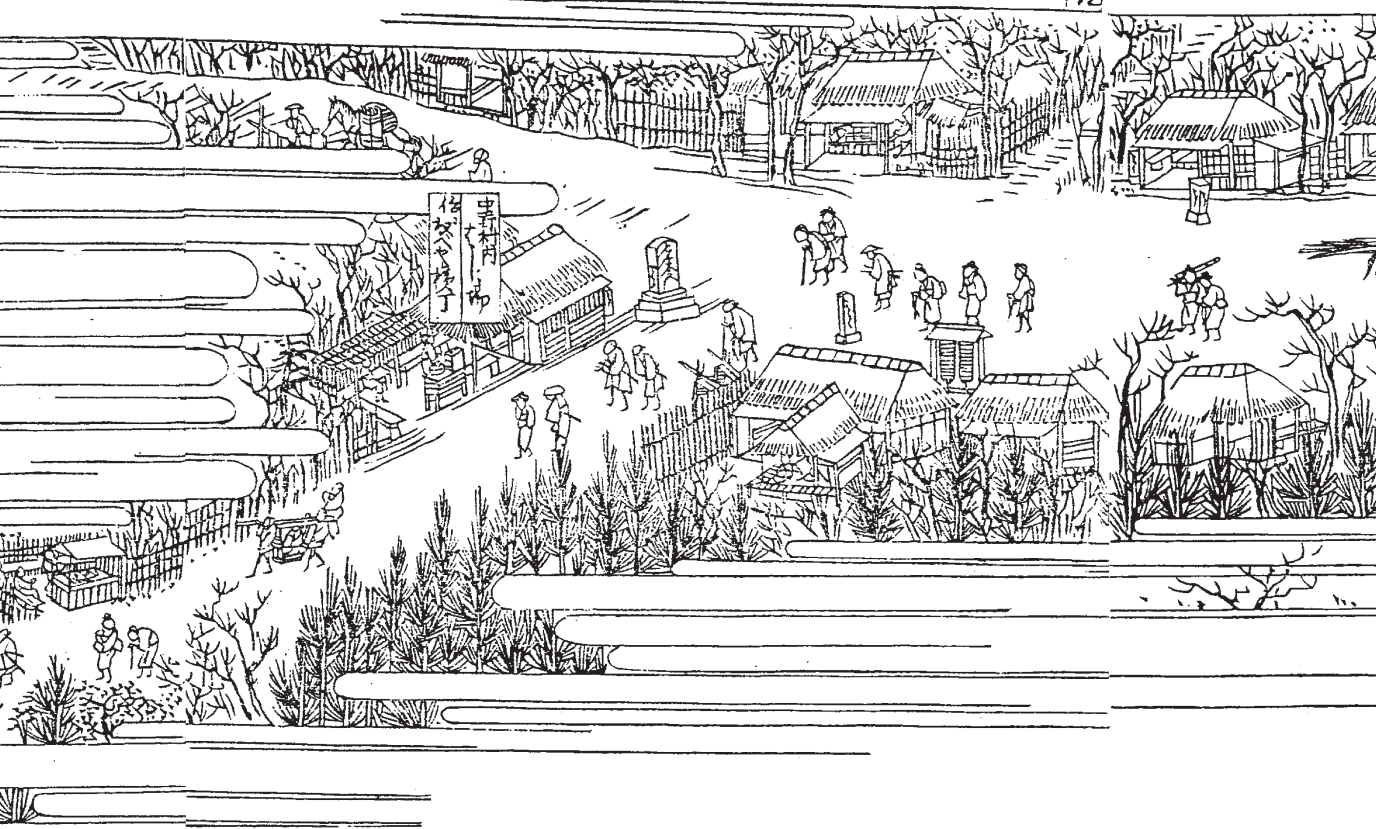


# 鍋横物語

見たい 聞きたい <sup>のこ</sup>記録したい

三海道

鍋横



—— なべよこ観察隊 ——

## 目次

序にかえて	2
発刊にあたって	3
鍋屋横丁の由来	
青梅街道	5
鍋屋横丁	6
鍋屋	7
昭和の鍋屋横丁界限	8
①阿波屋呉服店	9
②東京パン	12
③高野製粉所	13
④エトー文具店	14
⑤染と織 巴屋	15
⑥五柱五成神社	16
⑦慈眼寺	18
⑧道しるべ（お題目石）の移設	20
⑨転車台の現れた日	22
鍋横商店街の賑わい	26
商売の思い出	27
鍋横の映画館	
中野館	30
城西館	32
オデヲン座	33
文化会館（芝居小屋）	36
青梅街道筋の物語	37
青梅街道・思い出物語	38
鍋屋横丁未来への展望	44
発刊によせて（メンバーのひとこと）	46

## 序にかえて

前鍋横町会長 江藤利雄

まず、下のイラストをご覧ください。時は3月上旬、寒さの残る早春の午前中。処は青梅街道は鍋屋横丁交差点の一角。外国人の若いカップルが、かがみこんで熱心にスマホで写真を撮っているようです。見ると区道の間に、かわいい、枝垂れ梅一對で、一杯の花をつけているのです。すぐ傍らには石碑があり、その銘文にはこの一角は、幕末から続く茶屋「なべや」が、梅屋敷とも呼ばれていたと記されています。

彼の国では、梅は珍しいし、盆栽のような小宇宙が人気だそうですから、幼児のような枝ぶりが愛らしいと目をとめたのでしょうか。地元の人には、目にはとめても足はとめない交差点です。

家人が見たこのシーンを「一寸いい話」と思いその風景を描いてもらいました。今、私たちが、「なべよこ」と愛称しているこの地域を「なべよこ観察隊」は長い間にかけて活動を続けています。誰が植えたのか、この枝垂れ梅は、その小さな実りの一つです。

昭和から平成にかけての鍋横を探りこの時代を過ごした人たちからの聞き書きがこの1冊の集大成となっています。

天災も人災も大規模になって、明日一挙に滅びるかもしれない危うい現代ですが、なべよこを愛し、ここで暮らしてきた人々の営みを、ここで生まれここで老いた私も、誇らしく思っています。



江藤暢洋・画

## 発刊にあたって

『鍋横物語』は平成3年から活動を開始した「なべよこ観察隊」による鍋屋横丁の記録です。30年近くの間地域の方が語ってくれた話が、貴重な歴史の証言でもあり、まさに鍋横物語でもあります。

今まで発刊された冊子「見たい 聞きたい 記録したい」4冊分に新たな資料を加えて再編集しました。※文中の氏名は敬称略とさせていただきます



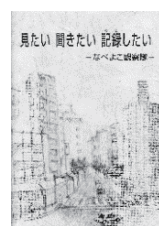
平成6年



平成11年



平成15年



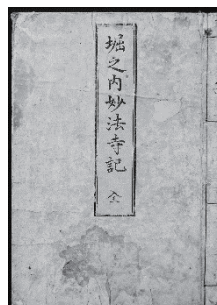
平成21年

### なべよこ観察隊 代表 彦坂雅子

かなり昔のことですが犬を飼うことになって、朝夕の散歩が日課になりました。犬と一緒に街を歩いていると、自然と周りの様子が目に入るようになりその変り方が気になり始めていました。この頃は都庁の移転もあり鍋横の周辺も建築ラッシュの状態が見られ、街の様子も急速に変化し始めていました。

街の発展はうれしいことですが古いものが失われていくのも現実です。移り行く街の姿を見て、古くから地域に住んでいる人たちに昔の鍋横の話を聞いて、それらの変化と思い出を記録していきたい…と思って仲間と一緒に「なべよこ観察隊」の活動を始めました。

表紙は「堀之内妙法寺記」の中の青梅街道鍋屋周辺の絵図です。内藤新宿から妙法寺までの道順の案内が太田蜀山人によって描かれた絵図で江戸時代末期文政の頃の作と推察されます。



※原本は中野歴史民俗資料館所蔵です。「中野村内 はし場 俗になべや横丁」周辺部分を拡大したものです。



# 鍋屋横丁の思ひ出

明治 — 大正の町並

江藤達雄様談

52. 9. 26

図表中 鍋屋及びかど屋の絵は想像したもの了解乞

染もの  
当麻

秋元酒店  
松山素貝

紺金

湯田  
自伝車

オモト

慈眼寺  
寺領 線内

古昔は堀越の西方  
桃園川上にあつた  
今も慈眼寺橋がある  
檀家家の寄付依り  
と行へらる

慈眼寺 正

交番

酒大電

米清水

高野(馬)  
大工増田

あんま(とら)

(明治四十五年一月二日大火事)  
薪がた  
から出火

凡呂屋

油庫  
楊井  
尾張

葛西屋  
高野家兼長電老氏定六之氏  
層造  
三本粉場造  
ほし場

かど  
松  
料亭  
角

川田

茶小川

茶橋田代

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

オトコ  
おちや  
田

昭和四五年拡張

元青梅街道(慶長十一年)

(後和電)(昭和三十五年)

(大正八年)

西武鉄道

梅田町土建料

其下南

宇田川

煮豆

並木

杉山

奥田

八百

阿波

服庫

河波

八百

阿波

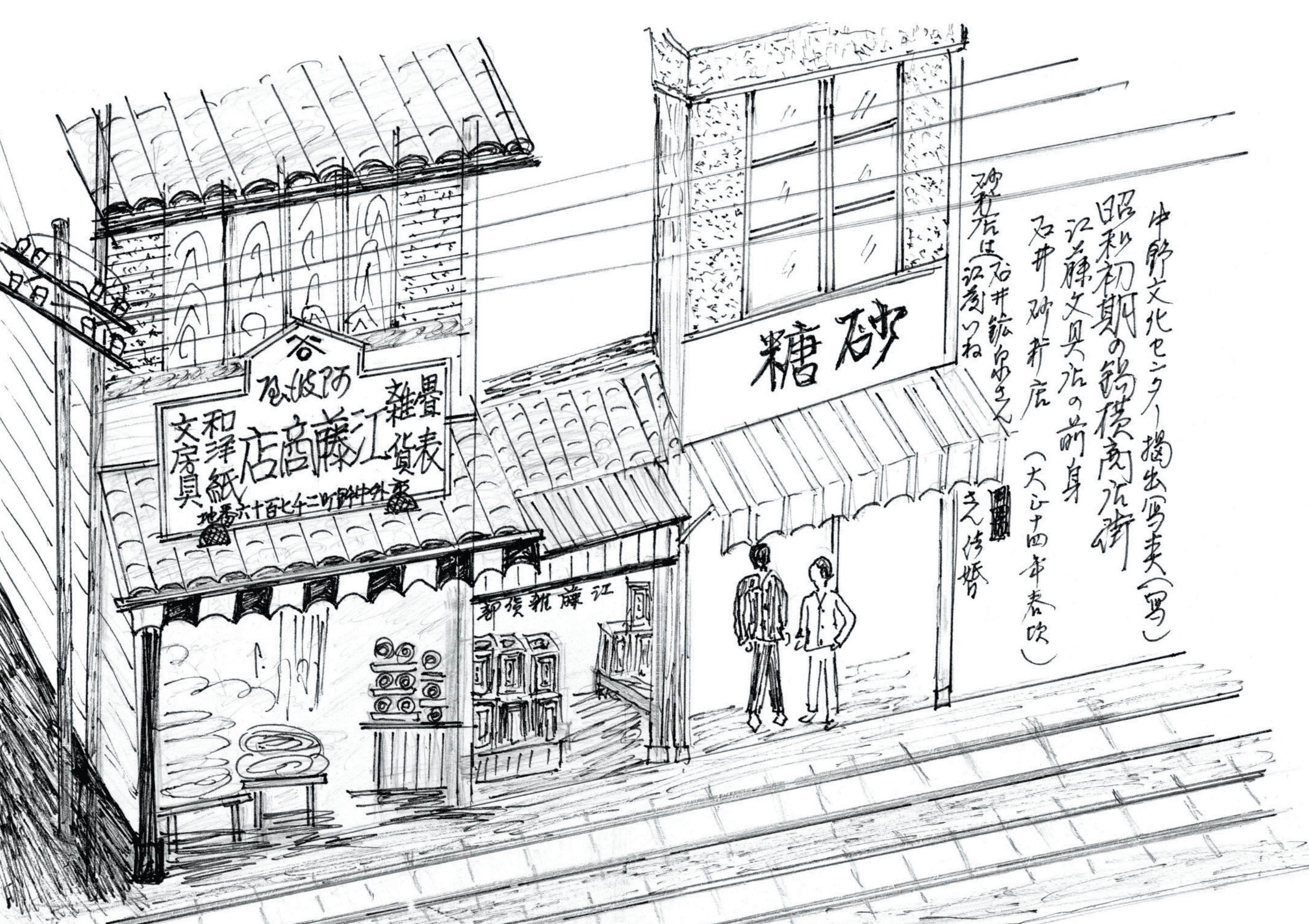
服庫

河波

八百

青梅街道拡張昭和四十六年

高野(馬) 石造之



谷  
和洋紙  
文房具  
江藤商店  
雑貨表  
外中二七十六番地

砂糖

江藤商店

砂糖店は石井銀白ゆき  
江藤のね

之は結婚

中野文化センター 掲出写真(写)  
昭和初期の鶴橋商店街  
江藤文具店の前身  
石井砂糖店 (大正十四年春頃)

# 鍋屋横丁の由来

## —青梅街道—

江戸五街道の一つ、甲州街道の脇道であり、慶長年間（徳川家康が江戸幕府を開いたのは慶長八年・1603年）江戸の城郭や寺院の造営に使う石灰を、産地の成木、小木曾地区（青梅の北）から江戸に運ぶために拓かれました。はじめ御白土街道、成木街道などと呼ばれていましたが、後に石灰輸送が行われなくなると田無からの支道であった青梅への道の方が多摩地方と江戸を結ぶ幹線道路として賑わうようになり、青梅街道と呼ばれるようになりました。江戸時代の中頃から、中野や練馬などの近郊農村では江戸市中向けの野菜づくりが盛んになりました。野菜づくりには大量の下肥が必要で、大名などに特別な縁故を持つ有力者が下肥の汲み取りを代々許されている例もありましたが、普通は江戸の武家屋敷や町屋、町辻の公衆便所から代金を払って調達していました。青梅街道は、明け方は野菜を積み江戸へ向かう荷車で、昼前は下肥を積んで村へ帰る荷車で雑踏したということです。

明治維新から約150年の間、日本の近代化、東京の大都市化の過程で、また戦争という非常事態の中で、沿道の街は様々な変容をとげてきましたが、青梅街道は一貫して大きくなってきました。4~5間だったのが、大正14年に拡幅され、昭和7年にはさらに13間5分と拡がりました。（淀橋際本町1~6丁目）また大正10年には西武鉄道の路面電車が走るようになりました。（のちに都電杉並線⑭番となりましたが地下鉄丸の内線の開通により昭和38年11月廃止）このような変化から見ても現在も交通量の多い東京の幹線道路になっていることは明らかです。

青梅街道からみた鍋屋横丁方面。本文登場の東横バス発着所や阿波屋呉服店が見えます。（昭和10年頃）





## —鍋屋横丁—

青梅街道は文政年間（1818～1829年）に堀之内の妙法寺への参詣が増えるにつれて道幅も拓げられ、次第に商人が進出し賑わうようになりました。参詣道の入り口に美しい梅林をもつ「鍋屋」という休み茶屋がありました。

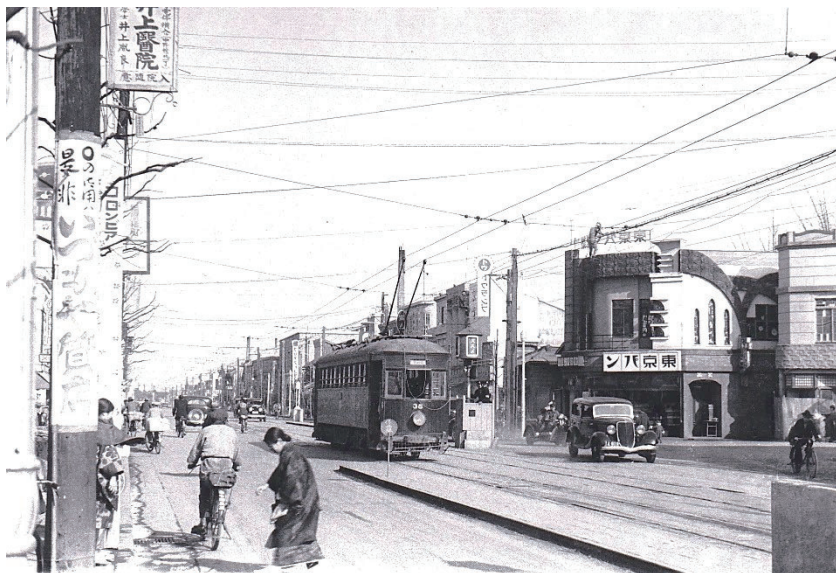
渋谷の恋文横丁、品川の青物横丁とならび東京の三大横丁（諸説あり）のひとつとして名高い鍋屋横丁。その名前の由来となっているのがこの「鍋屋」、江戸時代には草もちがおいしいと有名な茶屋で大変繁盛していたそうです。このことは、堀之内妙法寺記にその様子が描かれています。（太田蜀山人画・表紙参照）しかし、現在その名前は地名として残っているだけです。その後、江戸から明治・大正・昭和へと時代と共に道路も整備拡張され、多くの人びとが往来し、まちも大きく移り変わっていきました。



交差点近くにある鍋屋横丁  
由来の碑  
昭和54年に設立  
平成24年修復されました。

昭和9年頃の西武電車が走る鍋屋横丁交差点  
正面が東京パンです。

（撮影：石川光陽）



## —鍋屋—

鍋屋には美しい梅林があって、戦前までその辺り（三菱東京 UFJ 銀行から鍋屋横丁通りに沿っておよそ70m）は梅屋敷と呼ばれていました。鍋屋がちょうど堀之内の妙法寺への参詣道の入り口にありましたので、多くの善男善女がここで休憩したと思われます。

鍋屋は、姓を横田といい、代々勘右衛門を名乗っていたようです。当時の鍋屋の繁栄を偲ばせるものとして現在残っているのは東中野1丁目の氷川神社境内の鳥居で「文久二年（1862年）戌年九月願主鍋屋勘右衛門」と記されています。鍋屋が幕末の頃に寄進したと思われます。また鍋横交差点付近にあった堀之内まで十八丁十間と刻まれた「道しるべ」にもその名を残しています。

この鍋屋は明治、大正と時代が移り変わると共に衰退し、現在では地名に名を残すのみとなりました。



道しるべ「當所角鍋屋」と刻まれています。

昭和初めの東中野氷川神社  
その中に鍋屋勘右衛門が寄進した鳥居もあります。



梅屋敷の名残として石の橋があります。  
この橋は、後の持ち主江藤家より歴史民俗資料館に寄贈されました。

## 昭和の鍋屋横丁界限

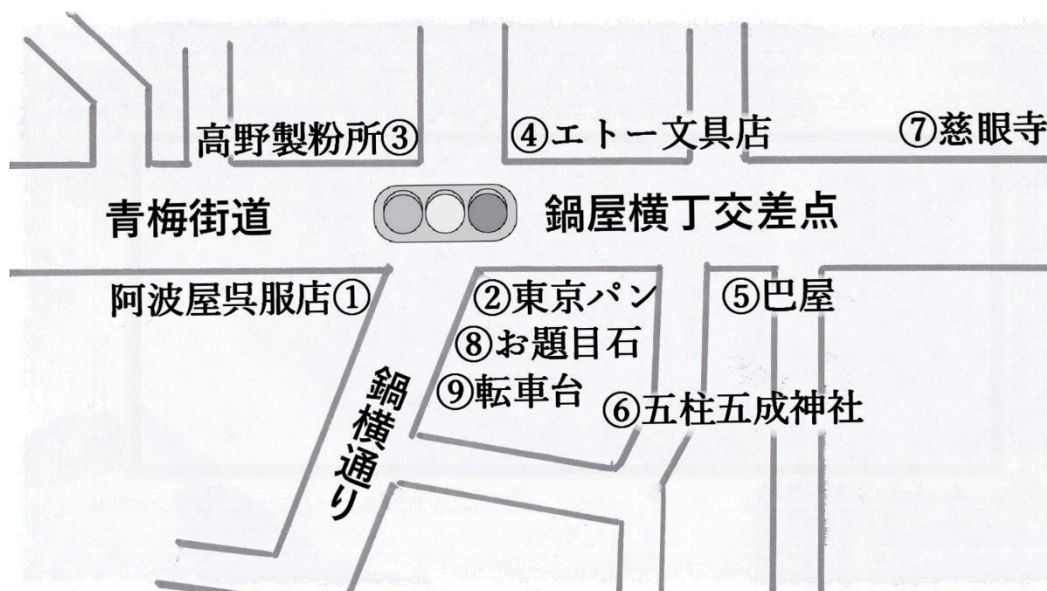
時代の流れと共に街の姿も変化していきます。鍋屋横丁界限も大きなビルが立ち並び都会の顔となり始めました。消えつつある昭和の風景とその思い出をいつまでも残すための記録です。



平成6年ごろの鍋横通り  
ペン画・町田泰

鍋屋横丁通り  
Nabeyayokocho-dori

平成29年道路標識は「鍋屋横丁通り」と正式決定して設置されました。



⑤⑥⑦は現在も同じ場所にあります。

## ①阿波屋呉服店

阿波屋呉服店は姓を江藤といい当地に六代以上続く旧家で、幕末には江戸の紺問屋仲間に属する大染物商でした。中野村の藍染めの紺屋は、その後、幕末まで1軒しかなく、手広く商売を行っていたそうです。

明治24年に呉服店を開業。間口20間の角店で座り売りのほか、箱車10台あまりで5里(20km)四方に売り歩く大店で近在に有名でした。

嘉永七年(1854年)の諸問屋名前帳によれば、紺屋問屋組合の十番組に名を連ねたほどの紺屋で、慶応二年(1866年)長州征伐の「上金高割小前取立帳」によると鍋屋とほぼ同額の1貫758文を取めています。このことから、当時の繁栄ぶりを伺い知ることができます。



上の写真はデパートのはしりともいわれた阿波屋呉服店の全景。

店内の広い階段は、服部時計店(銀座4丁目和光)から買い取ったもので当時の阿波屋は新宿の布袋屋(伊勢丹の前身)より売り上げが多かったそうです。

隣の江藤家具店とで嫁入り家具をそろえるのは当時のステータスでした。



青梅街道側にある阿波屋家具店  
窓から下の賑わいを見る店員さん。

## 阿波屋呉服店の「思い出ものがたり」

✍️唐沢政次郎：平成5年談

中野には、当時大きな商人がいたんですよ。青梅街道沿いにね。阿波屋さんでしょ。この近辺から荻窪にかけて有名だったんですよ「わた幸」って言ってね。青梅街道沿いの商店のあるところは明るかったね。街灯なんか商店街が作ったからね。一歩中に入ると暗かったけれどね。お客は近辺の人だった。大きな商売を鍋屋横丁でしてたのは阿波屋さんくらいだね。明治から大正にかけて新宿にデパートができるまで、ここから荻窪、吉祥寺の方まで、嫁入り支度をここでしたもんですよ。いいものは阿波屋でってね。おもしろい逸話があるんですよ。先代の時（昭和14年のこと）ですがね、戦争が始まって税金が高くなって払いきれない、それで町会で集まって協議したことがある。その時にね、阿波屋の番頭さんが来て「旦那の言いますには『国が大きな戦争をするためにお金がいるんですよ。そのためなら、身上ふるっても払います。博打や競馬で身上つぶしたらご先祖さまに申し訳ないけれど、国のためなら、何とも思わない』と言うんですよ」これを聞いて、ガタガタ言っていたのが、しーんとして、みな黙っちゃった。あれには驚いたな。

✍️江藤春雄：平成20年談

戦後ジャズ歌手や俳優としても活躍したディックミネがこの近所に住んでいて阿波屋に家具や呉服などの買い物に来る度に100円札を出して釣銭に困ったと聞いています。10円でも大変な額の時だったですね。

✍️江藤喜久子：平成20年談

幕末から現在に続く呉服店の一人娘として生まれ、鍋横の店が空襲で焼失するまで、祖父母、父母と三世代で住んでいました。その後は焼け残った本町6丁目に居を移して以来60数年になります。戦後店は再開しましたが、商売の方は父母と主人がやっていたので私は店の方に出ることはありませんでした。

祖父は大勢の使用人に対して、いつもブツブツと小言ばかり言っていました。ある日、落語を聴きながら笑っているのを見て、このおじいさんでも笑うことがあるのかとびっくりしました。家作に住んでいる家から出征兵士が出ると、その家から家賃はとらないんです。私が、貰えばいいのにと言うと「女は財産のことに口を出すな」と叱られたり、また食事がまずいなどと言おうものなら「そんな

こと言わず、黙って食べる」と怒られたりしました。

親戚の春雄さんとは年も同じだったし、家も戸を開けると庭続きだったのでよく遊びました。花火などをする時私は平気へいきという感じですが、彼は必ず水を持ってくるような慎重さがありました。

そういえば近くにモダンでしゃれた洋食屋（菊屋）があり、よく連れて行ってもらいました。菊の模様とロゴの入った食器が珍しく、銀のナイフとフォークを使う洋食屋で、行くのが楽しみの一つでした。



昭和10年春 賑わいを見せる阿波屋呉服店。右側の西武電車が走る青梅街道には手信号の信号機が見えます。



左の写真は戦災で焼失後に営業を再開した時のお店です。その後立て替えられ町を中心ともいえる存在でしたが、平成24年に閉店し、現在はマンションの建設が計画されています。

敷地内にある稲荷は当主の江藤喜三郎が榎屋平兵衛と共に詣でて「お墨付き」をもらって勧請したもので、五柱五成神社と兄弟稲荷と称されています。

今後は五柱五成神社にお移り頂く予定になっています。五柱五成神社 P16 参照



## ②東京パン

東京パンは鍋屋横丁交差点の角にあり、窓辺からは西武電車や青バス・銀バス、時には牛車・馬車の行き交い、台に乗った交通整理の巡査の姿など、町の賑わいが見られるお店でした。

当初は日清製粉の子会社で1階がパン販売と喫茶、2階が洋食、3階が厨房になっていました。洋食部はこの辺りでは数少ない洋食器を使用する店で、ポークソテーが評判でパンの両端に東京パンのマークが焼印されていました。



東京パンは戦前にシュークリームやスイートポテトなどの洋菓子があり、季節外れにリンゴなどのフルーツが食べられる貴重なお店でした。

建物の後ろに五柱五成神社のイチヨウの木が見えます。

### 東京パンの「思い出ものがたり」

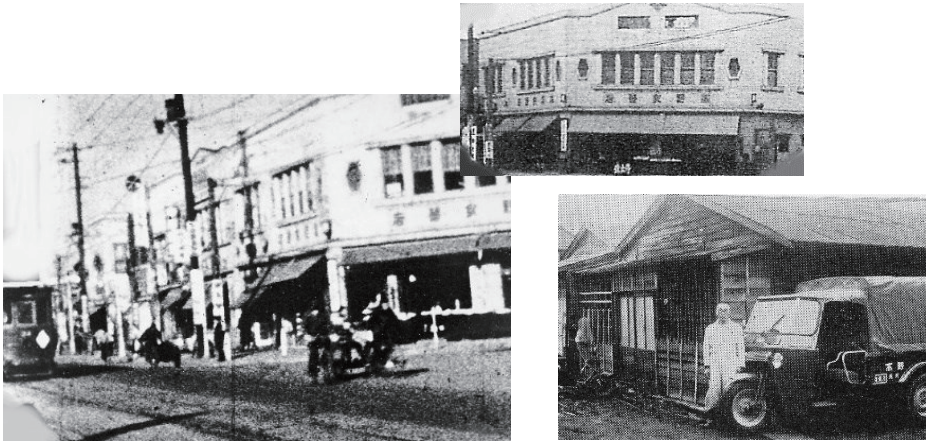
✍️新井喜助：平成20年談

私と東京パンの関わりは、父が戦後、唯一焼け残った鍋屋横丁店に移ってきてからです。当時は、パン屋にパンのない時代で、各種の食品を扱っていましたが、何しろ物不足で物資を集めるのに苦労しました。その関係から父が正田家に焼きたてのパンをお届けに上がっていたと聞いています。昭和25年ごろ(株)東京パンが閉店する際に父が後を引継ぎ、(有)東京パンとしました。その頃にはもう建物も老朽化しており、1階のみでパンや菓子類の販売と喫茶店を営業し私は喫茶部を担当しました。

近くにオデヲン座が出来てからは映画帰りのお客さんが大勢いました。昭和40年代には店は閉まり、現在は三菱東京UFJ銀行になっています。

### ③高野製粉所

中野の地場産業のひとつ、明治8年創業のそば粉の高野製粉所は屋号を葛西屋と言いました。そのため現在三味線橋通りと呼ばれているこの道は、以前は「かさいや通り」と呼ばれていました。製粉所のある敷地の前はガラスや金属のおしゃれな食器を扱っていた洋食器店でした。



鍋横交差点角の高野食器店。

左端に青梅街道を走る西武電車が見えます。

創業時の写真です。

### 高野製粉の「思い出ものがたり」

✍️高野マサ：平成14年談

昭和16年、宇都宮から鍋横の葛西屋に嫁いできました。うちは分家で乾物屋（現スーパーコーノ）を営み、本家は瀬戸物屋で家の奥に製粉所があり、蕎麦粉を挽いて近辺の蕎麦屋に売っていました。裏の空き地はそば殻がいっぱいに積まれ、それをまき代わりに使っていました。すごく暖かかったのを覚えています。

✍️小宮哲郎：平成20年談

この辺りで印象に残っていることは戦災で焼け残った高野製粉所の蔵にあった焦げたそば粉を、町会の役員の方々が手伝って近所に分けたり、近くを通りがかった人々が仲良く分け合っていた姿です。

✍️石塚光男：平成8年談

昭和8年～10年頃鍋横大通商店会は全盛期でした。昭和9年に東京音頭が大流行した前後の年に高野製粉所の庭で東京音頭の盆踊り大会がありました。



#### ④エト一文具店

戦前中野銀座ともいわれるほど賑わいを見せていた交差点の一角に鍋横の顔ともいえるエト一文具店がありました。店の大正～昭和～平成の移り変わりは鍋屋横丁の歴史とも言えます。



※左の写真

大正時代「江藤商店」として始まりました。昭和初期の写真の看板には畳表・雑貨・和洋紙・文房具の文字があります。

荒物から文具まで日用品なら何でも揃っていました。店の前は青梅街道で路面電車の軌道が見えます。



昭和初期、青梅街道が拡幅されるのを期に江藤紙文具店が堂々たる建物で誕生します。看板に昭和5年日記類売り出しとあります。街も戦前の最盛期へと向かいます。残念ながら昭和20年に空襲対策のための強制疎開で取り壊されました。

※右の写真

2階の窓の日除けが目新しい戦後の建物です。大きなパイロット万年筆の看板が目立ちます。昭和30年～40年の鍋横が登場する浅田次郎の小説「メトロに乗って」に出てくる「角の文房具屋」です。

昭和63年にエト一文具店も新しいビルとなりました。文房具もいろいろ変化を見せ、数多くの品が揃っていましたが、平成23年惜しまれつつ永きにわたる歴史の幕は降ろされました。



## ⑤染と織 <sup>ともえや</sup> 巴屋

大正2年巴屋染物店として創業しました。昭和2年頃建築のお店は昭和20年5月の東京大空襲を受けましたが焼失をまぬがれました。昭和20年8月～26年6月の間、店舗を空襲で焼失した当時の富士銀行に貸していました。



戦前と戦後の巴屋。

現在はビルの一角で営業しています。

### 巴屋の「思い出ものがたり」

✍️ 高橋 厚：平成5年談

《鍋屋横丁における富士銀行の変遷》

- ①安田銀行中野支店は昭和18年10月中央4丁目、青梅街道から追分通りに入るところで営業を開始しましたが、強制疎開（昭和20年3月10日以降～3月31日）となりました。
- ②昭和20年5月22日当時の阿波屋呉服店の場所に移りますが、5月25日空襲により焼失し一時、淀橋支店に移りました。
- ③昭和20年8月本町通4丁目の巴屋染物店を借りて営業。戦後、安田銀行は富士銀行と名前を変えました。
- ④昭和26年6月現在地を阿波屋呉服店より購入し営業を開始し、建物も昭和44年12月に新築されました。※現在はみずほ銀行が営業するビルとなっています。

✍️ 成瀬忠一：平成5年談

イチョウが火に強いとは聞いていましたが、この辺が焼け残ったのは、五柱五成神社の大イチョウの木から水が吹きだして戦火から守ってくれたおかげです。

ごしや いなりじんじゃ  
⑥五柱五成神社

樹齢150年以上のイチョウに囲まれた五柱五成神社は、現齋主の先祖榎屋平兵衛が文政六年（1823年）に京都伏見稲荷大社から勧請を受け、屋敷稲荷として祀ったのが始まりです。

祠（ほこら）とその前の道は、元々敷地内にありましたが、青梅街道へ出る抜け道として近隣の方を通してあげたところ、いつしか稲荷の存在が知れ渡り、願いが叶うなどの評判が立ち始め、地域の人々に親しまれてきました。また、昭和5年に「衣・食・住」の一切を司る稲荷神社として「天囀蔵五柱五成大神」と名付けられ、以前は祠になっていましたが昭和48年五柱五成と改名し現在の社殿に建て替えられました。

「日限りの稲荷」として7日間あるいは21日間と日限りでお願いし、大願成就には必ず五色の旗を揚げるようなしきたりとなっています。



昭和8年頃と現在の五柱五成神社です。

### 五柱五成神社の「思い出ものがたり」

✍️ 稲子知義：平成20年談

昭和20年5月鍋横が空襲を受けたとき、避難先の和田（杉並区）から家の方角の空が真っ赤になっているのが見えました。「焼夷弾で家は焼けてしまったかな」と心配して家に帰ってみると、家は焼けておらず、屋根だけでなく家の中にもまでのイチョウの葉がたくさん落ちていて戦火から守ってくれていました。「イチョウは火が近づくと水を噴くと聞いていたのは本当なんだ」と実感しました。

今ほど高い建物が無かった昭和30年頃、イチョウの枝ぶりもすごく、ムクドリ  
の集団が羽休めに来て「ギャーギャー」と鳴き声が騒がしく、またフン害にも悩  
まされました。有名な写真家が撮りにきたりもしました。群れが真っ黒い塊とな  
って飛び立つのが遠くから見えたほどです。

✎成瀬 光：平成20年談

家の裏にある五柱五成神社で友達とよく度胸試しをして遊びました。現在の  
立派な社殿になる前は祠になっていて、鳥居をくぐってその裏を廻ってくるだ  
けなのですが、とにかく怖かったのを覚えています。敷地はほとんど変わってい  
ない筈なのに、今では考えられないくらい距離があったように感じました。



昭和の初めと思われる写真で、稲荷が屋敷内にあったことが偲ばれます。  
後ろに大イチョウも写っています。



毎年3月の第2日曜日に行われる初午祭に大願  
成就が叶った感謝として掲げられた五色の旗  
と明治40年に奉納された江藤本店の銘があ  
る大きな幟り旗が目を引きます。

## じげんじ ⑦慈眼寺

慈眼寺は真言宗豊山派の寺院で福王山弥勒院と号し天文十三年（1544年）の創建と伝えられています。以前は慈眼堂橋（堀越学園そば）の西方に位置していましたが、江戸時代に現在地に移りました。境内左手にある氷川堂には、大変慈悲深く「生き仏」と慕われた第15代住職覚順和尚が祀られています。

旧本堂は文政・天保（1800年代前半）の間に建立されたと伝えられています。が戦災により焼失し戦後再建しました。

昭和54年に建立された金色のパゴダは、タイ国バンコックにある王立一級寺院ワット・サケートより寄贈された釈尊の遺骨一粒（カピラバストゥにて出土されたもの）が奉安されています。

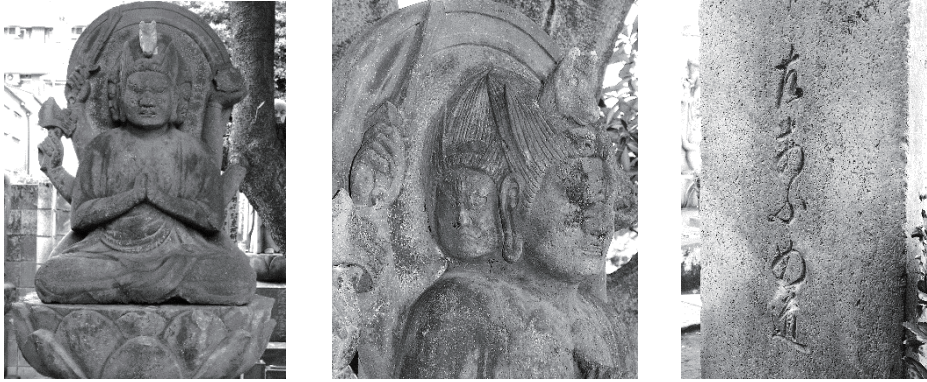


パゴダは仏舎利塔のことでお釈迦様のお舍利（ご遺骨）を安置するための供養塔です。



本堂の屋根からの雨水を溜める天水桶に大釜が使用されています。この釜は明治18年創業の「あぶまた味噌」から寄進されたものです。

慈眼寺の境内には多数の石仏があります。青梅街道の道路拡充工事などにより沿道にあったものなどが移設、安置された様々な石仏群です。



馬頭観音は頭上に馬頭をつけ、角柱部分は道しるべになっています。左あふめ道（青梅）、右いくさ道（井草）、と記されていて元は青梅街道と石神井道との分岐する追分の三叉路にありました。文化十三年（1816年）建立されたものです。



庚申塔は干支の庚申に由来するもので、日月、青面金剛、邪鬼、三匹の猿、鶏などが彫られています。元禄三年～寛保二年（1690～1742年）のものが6基あります。



地藏菩薩（お地藏さま）は西町天神の東側にあった西行寺から桃花小学校のケヤキの木の下に移され、さらに昭和30年に慈眼寺の境内に安置されました。

## ⑧道しるべ（お題目石）の移設

鍋横交差点近くのお店の間に明治11年建立の「道しるべ」としての石碑、お題目石がありました。元は青梅街道にあったものを、昭和5年の拡幅時に土地の所有者の好意でこの場所に移されたものです。

建立以来125年の歴史があり、鍋横のシンボルとして中野区の資料にも載っています。その側面に堀之内まで十八丁十間（1980m）と刻まれ裏側には鍋屋の銘があり、この辺りに鍋屋があったという証でもあります。

平成14年1月にこの場所にマンションが建設される話が持ち上がり鍋横町会長の江藤利雄氏を代表とする「鍋横道しるべ保存会」が設立されました。保存会で移設場所について話合いの結果、鍋屋横丁が古くから妙法寺の参詣道の入り口として栄えたまちであると同時に、現在も初詣や縁日、厄落としに詣でたりと馴染みが深く地の利の関係も良いという意見が多く、妙法寺に移設するのが望ましいという結論に達しました。

3月18日に移設の式典を行い各町会長、保存会のメンバー、地域の方々が出席し、そして石材店による移設作業が始まり、無事に妙法寺に運ばれていきました。この様子は3月21日の“シティーテレビなかの”で放映されました。10月12日に妙法寺では「日蓮上人生誕750年」ということでお題目宝塔建立記念の式典が盛大に執り行われ、それに合わせて「鍋横道しるべ」も敷地内に設置されました。



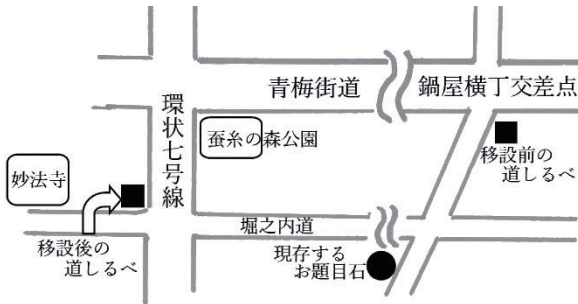
移設時の式典の様子と妙法寺参道入口に設置された道しるべです。

## 移設の「思い出ものがたり」

清水ヒサエ：平成14年談

「道しるべ」を壊さない方法で、出来ればマンションの片隅に置いてほしいと申し入れたところ「希望に添えないかも」と言われ、今後の移転場所を考えることにしました。区に相談したところ、地域の文化財的な存在なのに所有者がはっきりしない事や宗教色が強い事などで移転先の特定や文化財としての認定の申請ができないと言われ困りました。みんなで保存会を立ち上げることにし縁のある妙法寺に移設についてお願いしたところ、快諾をいただきました。

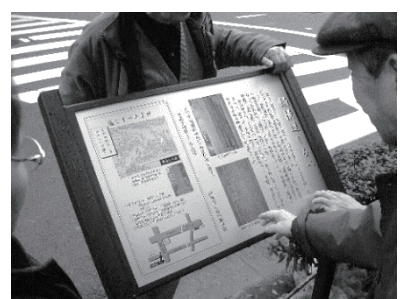
「道しるべ」も安住の地が決まり安堵したことでしょう。



現存するお題目石  
享保3年(1718年)妙法寺  
参詣道の道標として建立。  
ほりの内道と刻まれています。

移設後鍋横の地に「道しるべ」が存在した証を後世に伝えるための解説板を設置することにしました。

「道しるべ」の移設及び解説板設置にかかる費用は「道しるべ保存会」を中心に、地域の皆様からご協賛をいただき、平成14年12月10日に解説板を区道上に設置しました。



保存会による除幕式と出来上がった解説版です。



## ⑨ 転車台の現れた日

昭和初期から戦後の一時期、鍋屋横丁を始発とする大宮八幡宮行きの東横乗り合いバスの発着所（現本町4-30）がありました。道幅が狭くバスを方向転換するために転車台が設置されました。手動式で、上に乗ったバスを運転手と車掌が手で押して回転させていたそうです。横には地下への点検口があり中はすり鉢状に造られていました。

昭和6年に転車台を囲むように建てられた2階建ての建物は、幸いにも戦火を免れ無事でしたが、戦後バス路線の変更により発着所は廃止されました。

昭和21年に転車台の上に床を張り、内部を改装し東横バスの名前をとって東横喫茶店として50数年間街の人々の憩いの場となりました。

その後平成14年にビル建設に伴い喫茶店も取り壊されることになり、現存する転車台を記録に残すため観察隊の要望により発掘作業が行なわれました。



昭和10年頃、道幅の狭い鍋横通り。



向かい側の阿波屋呉服店前に止まっているバスの風景です。



東横バス発着所1階部分が転車台入口です。



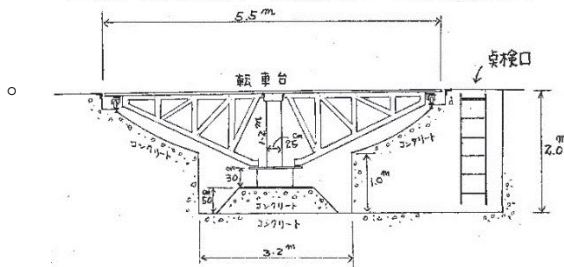
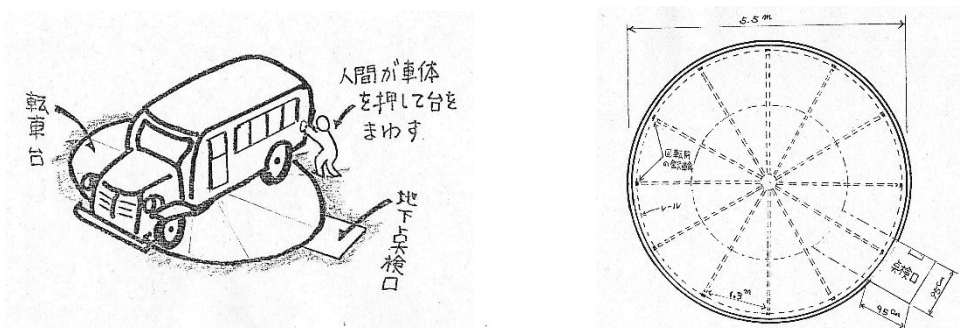
廃止後「東横喫茶店」になった時の写真です。2階は美容室でした。



鍋横商店街入口付近にあった「東横喫茶店」地下に転車台があった場所です。

### 転車台発掘で、鍋横在住・清水喜峰氏が書き起こした略図3点

転車台が当時どのように使われていたかを示すイラストと構造を上と横から見た図面です。略図といっても、かなり精密に描かれています。また、当時のバスはボンネット型で16人が定員の小ぶりのものでした。



「東横喫茶店」の床下、発掘中の転車台です。



解体直前 転車台の全貌が現れました。

## 転車台の「思い出ものがたり」

✍️江藤春雄；平成10年談

記憶によると東横バスが鍋横通りを走っていたのは、昭和20年の頃までと思います。当時の道幅は現在よりもずっと狭く、バスがやっと通れるくらいでした。そのためバスが方向を変えるためのターンテーブルがありました。

毎日、その側を歩いて小学校へ通って行きました。ターンテーブルの上に乗せたバスは、運転手と車掌が車体の前部と後部から押して回転させ向きを変えます。この時一緒になって押したりすると「危ないからダメ！」とよく怒られたものです。また、バスが来ない間は格好の遊び場でした。よく友達2~3人と、ターンテーブルを足でこいで回転させ、だんだんスピードが出てくると上に乗って、その回転を楽しみました。それは、まるでメリーゴーランドに乗っているような気分でした。確か小学校4~5年生の頃の事です。

ターンテーブルの床下は修理ができるように、人が立って入れるくらいの深さがあり、その中に入るための階段が横についていました。10年ほど前、千葉の方で同じようなものを見かけ、少年の頃、ターンテーブルに乗って遊んだことを懐かしく思い出しました。

✍️大羽圭子：平成14年談

家の中にバスが入って行って前向きに出てくるのが、子ども心に不思議だったことと、車掌さん（女性）が、かばんを前にぶら下げ笛をピーピー吹いていた姿が思い出された。

✍️桜田悦江：平成14年談

小学校2年生の頃（昭和14年）兄と二人でおこづかいを貰うとバス（片道子ども2銭）に乗りたかったこともあって、よく大宮公園に行き魚釣りをして遊びました。食べ物などを買ったりして帰りのバス代を使ってしまい、夕方暗くなりかけた道を、泣きながら家まで歩いて帰ったことを思い出しました。

✍️清水喜峰：平成14年談

どんなものが出てくるか、興味があって手伝ったが、月日を越えても風化せず、鍋横の地に眠っていた転車台が出てきたときは大変感激した。

✍️彦坂雅子：平成14年談

観察隊の活動を始めて以来、鍋横で生まれ育った人たちの話に「友達5、6人で回して乗って遊んだ」「遊んでいるとバスが来て危ないからと怒られた」「確か…今、東横喫茶店になっていてその中であつたよ」と転車台のことがよく出てきました。まさかPTAの集まりでお茶していた床下に埋っていたなんてびっくり！です。いつか見られればいいなあと…、その時が来たのです。

鍋横にとって貴重な財産となるもので、壊されると聞いて何とか保存できないかと、いろいろな関係方面に交渉したんですが、大きな物で移動場所がないなどと断られたのが唯一の心残りです。手元に残った一個の滑車はその時の思い出です。



東横喫茶店の後に建てられた  
NSdimora ビル



残された滑車。  
直径18cm重さ13kg

# 鍋横商店街の賑わい

時代の変遷で商店の数も減ってしまいましたが、昭和の30～40年代は100店舗以上もあり。ほとんどの生活用品は地域で事足りました。現在の商店街はマンションなどが立ち並び、お店もかなりの様変わりをしています。 ●印は現在も営業しているお店です。★印のお店でお話を伺いました。



## —商売の思い出—

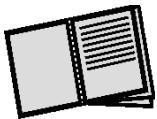


下駄屋さん

高野キヨ子：平成10年談

鍋横通りで下駄屋を営んでいた頃、周囲にはたくさんの商店があり、ほとんどの日用品は近所でこと足りた時代でした。通りをはさんで向かい合って魚屋があったりしました。

下駄を商品として店に出す前にすることがあります。問屋から仕入れた土台桐の左右に合判を打ち、面とり（角を丸くするため木で擦る）します。表面と側面に砥の粉を塗り、乾かして砥の粉をワラのブラシで取り除きます。これを2回くらい繰り返す、次に艶出しのため蠟を塗ります。（蠟は値段の高い下駄には上質のものを、安いものは普通の蠟を使います）その後、瀬戸物で出来た道具で、表面をよく擦ります。鼻緒を挿げ、裏の前鼻緒の所に前金を打って出来上がりです。磨いたりするのが結構力仕事だったんですよ。



文房具屋さん（富士屋事務器）

深山雄暉：平成20年談

母親が現在の場所に文具店を開店したのは昭和20年のことです。9月から中野本郷小の6年生に転校して、昭和31年に店を引き継ぎ現在に至っています。

「鍋屋横丁に引越しよ」と言われた時、有名な地名だし、浅草の仲見世みたいな所かな？と思っていましたが、来て見ると道路が広く両脇に約150店舗が並んでいる大きな商店街でした。

当時のお中元・暮れの大売出しには福引が盛んでした。三種の神器（白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫）などを特賞の景品にした為、福引券を貰う大勢の買い物客で、商店街全体が繁盛しました。

文具の売れ筋はなんといっても、セロハンテープ・ホッチキス・マジックインクなどが当時の画期的な商品でしたね。

一番大変な出来事として思い出されるのは、昭和39年に近隣4軒が焼けるという大火に見舞われたことです。家は全焼してしまいましたが、夜更かししていたのが幸いして、人命救助の表彰をされました。



本屋さん（本郷堂書店）

天野弘子：平成20年談

私が生まれる前、家族は文京区の本郷に住んでいました。関東大震災で家が焼け、翌年鍋横に越してきて、大正の終わりか昭和の初め頃に、父が「本郷堂書店」を開業しました。店名の由来は、文京区の本郷から鍋横の本郷の地に来たので、本郷堂と名付けました。中野本郷小学校関係の納品をしているので本郷堂かとよく聞かれますが、中野本郷小学校は昭和3年開校ですから、本郷堂のほうが古いのです。住いは、キセル占いで有名な茂木邸（現在の区民活動センター所在地）の右路地を入った奥にありました。

本郷堂の建物は新宿区柏木で開催された博覧会で使用した木造低二階建てを移築したもので、間口は4間（7.2m）あり鍋横商店街では広い方の店でした。この地域は戦災に遭わなかったので、戦後は一時、新山小学校・一中・二中などの教科書、文房具を扱っていました。父は、子どもさんが本の立ち読みをすると、ハタキを掛けたりしたので近所では雷親父で有名でした。その頃は私も店の手伝いで、十貫坂を下って、救世軍療養所や和田堀の大谷家まで本郷田んぼを越えて本の配達をしたものです。その後、教科書も無料配布となり、本の扱いも減ってきたので、昭和45年に家を建て直した際、店を二分して片方を貸店舗にし、本郷堂は昭和54年まで営業しました。



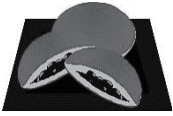
魚屋さん（越後屋）

小林ミツ：平成20年談

昭和14年魚屋に嫁いできたときは丁度鍋横の通りが今の道幅に広がった時期でした。昭和25年に魚の統制が廃止されてからは、朝4時に起きて、魚河岸に行く夫を送り出すと、9時にはお店が開けられるように準備して、夕刻魚が売り切れるまで商売が続きしました。

昭和40年代の鍋横には、100軒を超す店舗があって賑わっていました。お客さんも殆ど顔見知り、まずは世間話から始まりました。「こうしたら美味しかったよ」とお客さんから調理法を教わったり、冬でもシジミの水洗いは欠かさなかったので「お宅のは泥臭くない」とか「お造りも小骨が丁寧に抜かれているか

ら子どもにも安心」などと喜ばれました。それを聞くと嬉しくて苦勞になりませんでした。このようなお客と対面する商売が減ってきたのは寂しい気がします。



和菓子屋さん（鳳月堂）

須藤勝見：平成20年談

戦前は青梅街道の西京信用金庫の辺りで和菓子屋を営んでいました。戦後現在の本町4丁目（アンサンブル新中野ビル）でお店を再開しました。

私は文京区本郷三丁目にあった羊羹で有名な江戸老舗藤むら※で修業し「シヨキチョウ」と呼ばれていました。今でもその名残で職人さんのことをそう呼んでいます。ほとんどの和菓子のつぶ餡は自家製で作ります。こし餡は機械がないと出来ず大体は餡専門店から仕入れるのが多いのですが、うちは小豆からこし餡を作っているのが特徴です。また、浅田次郎の小説「メトロに乗って」に出てくる花鳥堂のモデルではないかと言われているんです。

※森鷗外や夏目漱石の小説に登場。明治～昭和の文人墨客に愛されていましたが平成になって惜しまれつつ閉店しています。



スーパー大谷屋（スーパーのはしり）

安藤幸好：平成20年談

私がこの付近に住み始めたのは4～5歳の頃で、現在中野通り（戦時中に強制疎開によって出来ました）になっている所に4軒長屋があって、そこで親父が煮豆屋の商売を始めたときですから、75年になりますね。

この頃はまだ商店もまばらで殆ど原っぱでした。周囲に人が住んでいなかったから商売もなかなか大変だったけど、関東大震災（大正12年）後、下町の方から焼け出された人々が移って来て爆発的に住宅が増えて、息を吹き返しましたね。近所付き合いも大らかなものでした。2軒隣のブリキ屋で朝早くからトントン叩く音がうるさいんですが、「おっ！今日も忙しそうだな」と喜んだりして、今だと騒音だったんで大変ですよ。



## 鍋横の映画館

鍋横地域には、戦前から人びとの娯楽のひとつである映画館がいくつかありました。スクリーンを通してその時どきのスターに憧れた方も大勢いたことと思います。残念ながら、それらの映画館もテレビが普及し、人びとの娯楽も多様化していくにつれていつしか閉館されていきました。現在は建物も残っていませんが、思い出は多くの人々の心に残っていると思います。



### 中野館（旧本町通 4-36・現中央 4-2）

日活映画の上映館として大正10年開館。旧鍋横通りのせともの屋「小川園」の先々代が経営していました。高い建物は空襲の時に目標にされると言われて昭和19年強制疎開で取り壊され閉館しました。



昭和10年ごろの中野館の全景。

昔懐かしい映画館の建物です。

「鍋横区民活動センター」に区の資料として保管されている日活撮影のフィルムからの写真です。当時の鍋屋横丁の様子や、中野館観桜会、各町会のお祭り、神輿などが撮影された記録映画です。



追分通りから見た風景と中野館の入り口付近です。興行映画の宣伝や役者のポスターなどが飾られています。右下は切符売り場です。



当時大人気の嵐寛寿郎の十八番むっつり右門捕物帳のチラシです。



戦後は建物も焼失に遭い、コンクリートの映写室は残されていましたが昭和43年頃マンション建設のために取り壊されました。

## 中野館の思い出

✍️川本正太郎；平成20年談

自宅そばの中野館という映画館へもよく行きました。その頃の映画は、弁士が語り音楽を流すというものでした。フィルム数が少なく他の上映会場とかけもちのため、自転車で運搬する人がいました。小さい映画館でしたが楽しみの少ない時代でしたのでいつも満員でした。今だから話せますが、中野館に知り合いがおり、無料で入場していました。

✍️石塚光男；平成8年談

中野館が無声映画の時、徳川無声や山野一郎（漫談家）が来ました。俳優の山内明は山野一郎の息子で、私とは桃園第一小学校の同級生で家に遊びに行った時大河内伝次郎が来ていました。

✍️会田幸子；平成14年談

キャラメル空箱を数枚持っていくと、中野館で映画がただになり、「20世紀の世界」というアメリカ映画を観たことを覚えています。キャラメル空箱は大宮公園まで拾いに行ったものです。

いろいろな店に貼ってあるポスターの隅にある三角（ビラの下）を切り取って持っていっても無料で入れました。

## 城西館（旧本町通4-8・現中央3-32）

松竹映画の上映館として大正12年開館。戦前は慈眼寺の並びにありました。強制疎開によって取り壊され、戦後現在の中央3-25に移り開館しましたが昭和35年前後には閉館しました。



昭和十三年発行城西館ニュース。映画以外にも土曜・日曜には深夜漫才が興行されていました。夜九時より料金十銭均一とあります。

## 城西館・中野館の思い出

✍ 能勢小夜子；平成5年談

戦前、戦中、戦後から中野に向かって、青梅街道の北側に何軒かの映画館がありました。ほかに楽しみのない時代でしたから、遠くまで大人に連れられ休みの日や夜に（割引があるので）よく観にいきました。

中野警察から杉山公園寄りに城西館があり、松竹下加茂や大船の映画を上映していました。「雪之丞」の林長二郎、「愛染かつら」の田中絹代、桑野通子、森川まさみ、「浅草の灯」の高峰三枝子、時代劇の坂東好太郎、高田浩吉、川浪良太郎と懐かしい顔が浮かんできます。叔母が、少しの間もぎりをしていたので、昭和1ケタの時から観に行きました。満員で通路に座って観たこともあります。

休憩時間に「おせんにキャラメル」と籠を胸に下げて売り子さんが廻っていました。どの映画館も小さくて、トイレの臭気も感じられるような小屋でしたが、人々の憩いの場所でした。

追分通りには中野館がありました。日活映画が上映されていました。「暢気眼鏡」の杉狂児と轟夕起子、「土」の山本嘉一と風見章子、「宮本武蔵」の片岡千恵蔵と宮城千賀子、阪妻や嵐寛の時代劇には胸がどきどきしましたっけ。

戦争の厳しさが身に染みる朝晩、空襲、空襲のあけくれで映画どころではなくなり、殺伐とした日々。3月10日の大空襲で、青梅街道の北側に住んでいた人びとの家は強制疎開で壊され、懐かしい人びとも散り散りに去って行き、追い打ちをかけるように5月25日の空襲に遭い、すべてが消え去りました。昭和20年から50年近くたった今、古い映画館が生きいきとして私の脳裏に蘇ったのは不思議な気がします。

## オデロン座（旧本町通4-30・現中央4-1）

昭和25年12月、都電杉並線鍋屋横丁電停北側に開館。当初の名称は「中野ロマンス座」でしたが、昭和30年頃「中野オデロン座」に改称され、洋画や東宝映画が上映されていました。昭和54年に閉館され、現在は10階建てマンションになっています。

浅田次郎の小説「メトロに乗って」に登場する映画館です。



当時の中野オデオン座の入り口です。

下の写真は平成18年10月21日に公開され映画「メトロに乗って」の撮影のため静岡県伊東市に再現されたオープンセットです。



### 城西館とオデオン座の思い出


✍️ 清水ヒサエ：平成20年談

昭和30年頃、友達に連れられて城西館には度々行きました。東映、大映の時代劇など3本立が上映され夜7時30分頃から割引となり一本半位観ることが出来ました。

木製のベンチのような長椅子で左右の椅子が真ん中に向かってかすかに傾斜していて、観ているうちに段々と体がずれていったのを覚えています。

結婚してからは近くにあったオデヲン座に子どもを寝かしつけてよく観に行きました。印象に残っているのは、「戦争と平和」や山口百恵の「霧の旗」などです。ある時、子猫程もある大ネズミがスクリーンの下を縦横に走っていて、びっくりしたこともあります。

## オデヲン座の思い出


 肥後正子：平成10年談

私が子どもの頃の鍋横は原っぱが多くて、あっちこっちで盆踊りや草相撲等をやったりしてました。鍋横の交差点の辺り（中央4-1）も原っぱが多かったけど、そこに「オデヲン座」という映画館があって、たしか最初は「ロマンス座」という名前でした。「本郷たんぼに行ってきます」と言っちはあっちこっちの映画館に行っていました。鍋横には古くから「城西館」や「中野館」という映画館がありましたが、戦時中の強制疎開で取り壊されてしまいました。


映画館の中では「おせんにキャラメル」といって売り歩いている、たしか一銭であめ玉が3～4個買えたと思います。

戦後、娯楽といえば映画ぐらいしかなく、立見ができるほど混んだときもありましたが、テレビが普及したせいかだんだん観客も減っていきました。

私もすっかり映画館に足を運ばなくなって、気が付くと鍋横に最後まで残っていたオデヲン座もなくなっていました。


 江藤利雄：平成20年談

オープン時上映された大谷友右衛門主演の「佐々木小次郎」を観た。すごくかっこよかった。

 川井陽子：平成20年談

子どもの頃絵本の世界の中だけで夢見ていたディズニー映画を中野坂上から都電に乗り、ちょっぴり大人になった気分でわくわくしながら観にいきました。

車窓から見える青梅街道の風景も賑やかで、昼間にも関わらずなぜかオデヲン座周辺がキラキラ輝いて見えたのを子ども心に今でもはっきり覚えています。

 木口 弘：平成20年談

妻との初デートはオデヲン座で洋画を観て、東京パンのパーラーでお茶を飲みました。当時としては一番洒落たコースでした。

✍️高野允雄：平成20年談

「下町の太陽」で爆発的な人気でた女優、倍賞千恵子が隣の美容室で着付けをして舞台挨拶に来たことがありました。また、夏にナイトショウの先駆け館として、上映時間が延長されました。

✍️成瀬 光：平成20年談

雪のシーンを観ていたら、天井が割れて本物の雪が降ってきて驚きました。建物が老朽化していたのでしょうか。また、館内も空いていて休憩時間以外にトイレに行くのも怖かったです。

## 文化会館（芝居小屋・本町4-19）

鍋横には3軒の映画館と他に大衆演劇を興行していた文化会館がありました。

### 文化会館の思い出

✍️大羽圭子：平成20年談

昭和22年私が小学5年生の頃、戦後の娯楽の少ない時に歌謡ショウ、チャンバラ、踊りを演ずる芝居小屋があり、毎日のように親からお小遣いを貰い観に行きました。客席は座敷で毎日大盛況でおひねりを投げる人もいました。

夕方になると今日の出し物は…とチンドン屋（三味線と太鼓）もどきが近所を触れ回っていました。

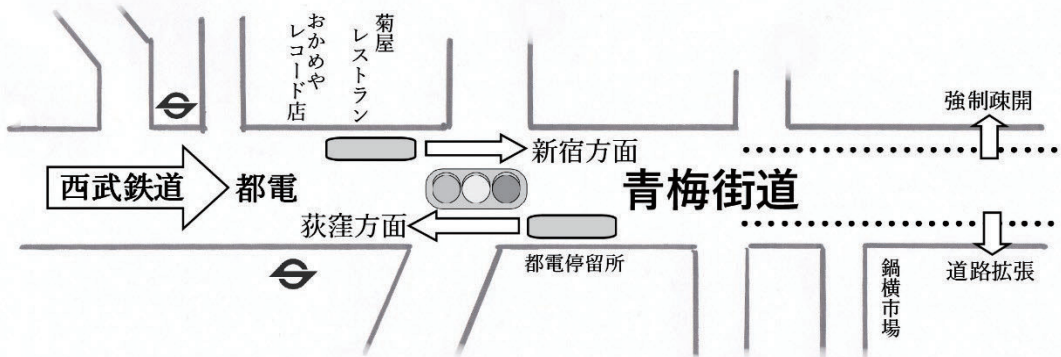
✍️長谷川まつ江：平成14年談

周囲は原っぱで、家の前に芝居小屋がありました。古いけれど立派な建物で、舞台も大きく2階にも客席がありました。主人の妹が日舞の師匠をしていたので芝居がない時は、小屋を借りておさらい会を開いたりしました。

芝居は半月ごとの上演で、次から次へと旅役者の一座が興行していました。娯楽の少ない時代だったので、客席はいつも一杯でしたよ。役者さんは、家族で芝居小屋に寝泊りして、近所の風呂屋にも通っていたようです。確か昭和35年頃までであったのでしょうか。その頃、「ひかりや」という食堂を始めました。夏はかき氷、冬はおでんと簡単なものですが、役者さんが食べに来たり、ごひいき筋が「役者さんに差し入れて」と、利用してくれました。特に思い出にあるのは夏に浴衣姿で縁台に腰掛け、かき氷を食べている役者さんの姿ですね。

# 青梅街道筋の物語

鍋横交差点のある青梅街道は太田蜀山人が描いた馬や籠の風景からおよそ190年、大きな移り変わりを見せてきました。戦前戦後にかけて道路の拡張や強制疎開などがあり、また、交通も単線の西武電車から都電、地下鉄の開通など変化を見せます。この地域の人々の思い出物語の中に、その歴史の1ページを垣間見ることができます。



西武鉄道開通 大正拾年八月新宿―荻窪間  
 停泊所名(中野時代) 須崎―住友銀行前―至世宇前  
 至世宇前―中野銀行前―中野銀行前  
 昭和十五年五月都電となる  
 停泊所名 本町通二百―本町通二百四  
 本町通二百四―本町通二百四  
 バス開通 新宿―中野―池袋 池袋―大正八  
 大正八―池袋 池袋―大正八  
 市営バス運行 大正十一年一月十八日  
 料金 一區間 金五銭也

「差し込み」に張られていた覚書の中に西武電車大正拾年八月新宿―荻窪間開通。市営バス料金一區間金五銭也などの説明が書かれています。



## 青梅街道・思い出物語

### 青梅街道拡幅前後の話

語り部：植野國男・平成14年談

青梅街道が昭和4年に拡幅されることになり、米屋をやっていた私の家は道路になるということで立退きとなりました。拡幅前の道幅は10間位(約18m)だったでしょうか。真ん中を西武電車が走っていました。

雨が降ると道がぬかるみ自動車が通ると大変で、跳ね上がった泥が家の中まで入ってくるのを店の前に戸板を立て泥除けにしました。

また淀橋のやっちゃ場(青物市場)に野菜を積んで行く馬車が何十台も通るので、道いっぱい馬糞だらけになってしまい、その片付けはもっぱら子どもたちの仕事でした。

拡幅後に道が整備されて歩道ができると、道を挟んで土・日ごとに交代でどちらか一方の側に夜店が出るようになりました。バナナの叩き売り、セルロイドのおもちゃ、着物の反物などを売る店が連なり、両端は必ず植木屋でお店全体の3分の1ほどありました。夜になると灯りに使うアセチレンガスの独特の臭いが漂っていたのが忘れられませんね。

### 西武鉄道の話

語り部：唐沢政次郎・平成5年談

あたしの子どもの頃は、青梅街道沿いに新宿から今の新中野郵便局までずっと一列に家はあったんです。ほとんど商家でした。それから先はずつと畑でね。家の後ろは九尺二間の長屋があるだけであとは全部畑。挑園小学校がここいら(本町4-43)から見えたくらいですよ。

道幅も今の半分以下、そこへ電車が入ったんだから狭いもんでしたよ。亀の子電車(当時の西武鉄道のち都電⑭番)が新宿-荻窪間を通ったんです。人がいっぱい乗っちゃうと中野の坂を上がれないので「みなさん、済みません、降りてください」なんて大変な電車でしたよ、単線でね。

昭和4、5年頃だったかな、青梅街道のこっち側、南側がとられて、ずっと道幅が広がって、亀の子電車も複線になったんですよ。



巡査の立ち番による鍋横交差点近くの交番です。



氷川社祭礼の時の西武鉄道（亀の子電車）と神輿。

### 昭和初期の洋食屋「菊屋」

洋食屋としては東京パンより先に始め、格式もあり菊の模様とロゴ入りの食器を使用していました。

語り部：小倉一祐・平成10年談

私が鍋横交差点近くに洋食レストラン菊屋を開いたのは昭和3年、20歳のときです。当時、中野駅北口一带に陸軍の電信隊があったのですが、駅周辺には旅館が2軒あるだけで、中野の中心といえば鍋横から宝仙寺周辺だったんです。休日になると兵隊たちが追分通りから鍋横周辺に繰り出し、大変賑わっていました。とりわけカレー軒は美人のウェイトレスがいたので、兵隊たちに人気があり繁盛していました。

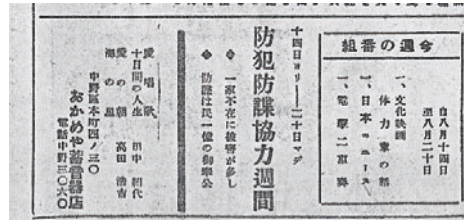
私の店は上野精養軒の御料理として日替わりメニューを出したことが評判となり、大勢の文士の方によく利用されました。トイレを水洗にしたり、電気冷蔵庫をいれたのも中野で最初でね。

文士の事で思い出すのはナップ（NAPF：全日本無産者芸術団体協議会）や中野会（中央線沿線に住んでいた文士の集まり）の人たちです。中野会は発会式もうちでやりましたし、毎月集まっていたね。確か、詩人の春山行夫（1902～1994年）と百田宗治（1893～1955年）が幹事をしていました。なかでも作家の伊藤整（1905～1969年）は、近くに住んでいたこともあって毎日のように来ていましたね。

店では当時としては珍しいナイフとフォークを使っていたので会合が終わると数を確認していました。ある文士さんたちの会合の後でナイフが足りない時があり、文士さんに言うわけにもいかないので、そっと勘定書に上乘せしておきました。そうしたら、文士の間で調べたそうで、ある著名な作家が持っていったのが分かりました。多分よく切れるので紙切りがわりにでも使おうと思ったのでしょうね。



城西館のチラシ広告。  
菊屋と隣の高野食器店  
が載っています。



中野館のチラシ広告。左側  
おかめや蓄音機店の宣伝です。

## おかめやレコード店

語り部：江藤春雄・平成20年談

おかめやレコード店では、朝から晩まで当時の流行歌（愛染かつら・東京音頭など）をスピーカーから流しっぱなしでした。現在だとうるさいとか騒音の対象になるところですが、それが許された時代でした。

## 鍋横市場の話

語り部：百瀬徳蔵・平成14年談

鍋横市場は鍋横交差点先の「しおのビル」と、その横の駐車場（本町4-1）のところに、昭和40年代までありました。この辺りは戦災を免れたので、戦前からある古い建物でした。ひとつの大きな建物の中に、八百屋、肉屋、魚屋、佃煮屋、荒物屋、乾物屋など12軒の店が入っていて2階にそれぞれの家族が住んでいました。私はその隣で、昭和24年から平成2年まで手焼きせんべい屋を営んでいました。手焼きと言っても、網の上で1枚1枚焼くのではなく、網と網の間にはさんで釜で焼くんです。燃料には備長炭を使ってました。

うちも商売していて忙しかったし、この地域に、まだスーパーマーケットなどない時代だったので、鍋横市場は毎日のように利用していました。日常の買い物

のほとんどがここで間に合って、とても助かりました。昭和37年頃まで、鍋横市場の中に井戸があって近所の人がよく水を汲みにきていました。当時は水道が引かれてなかったので、市場の井戸をみんなで使っていましたよ。

## 夜店の思い出1

語り部：唐沢政次郎／小林保雄・平成5年対談

「毎月21日が宝仙寺の大師様の縁日で賑やかに夜店が出ました。むしろを敷いて品物を並べて売るんですよ。戦争前、昭和12、3年くらいまで続きましたかね。欠かさず行ったもんですよ」「私もありますよ」「今のお祭りに出るようなお店が出るのね。露店商の集まりがあってね。お祖師様のご利益なんてやってたのが、次の時には草履を売ってやんの。柴又の寅さんみたいなもんだね。親分がいてね」「バナナの叩き売りなんかもあったんですよ。一晩ともたない、翌る日はまっ黒になっちゃう。それから将棋もありましたね。大道将棋」「詰め将棋あんなの勝てないよ、なかなか。勝つと将棋の本をくれる、そしてお金は払うのよ。台を置いて、その上に蓄音機を置いて、レコード1枚聴かしていくらってのもあった」「遠眼鏡ってのもありましたよ」「大道芸人で全くなくなっちゃったのは、あほだら経ですよ『チョイト出ましたカッチャカッチャ無いもの尽くしで申そうならばナントカとナントカはなくてオンバサンノアラブチャこいつも無え』なんて言って笑わせるんだ。こういう芸人いなくなっちゃったね。あとなくなっちゃったのは、義太夫みたいな、なんて言ったかな……」

## 夜店の思い出2

語り部：上島昌之・平成20年談

昭和10年頃のことですかね。鍋横の思い出はなんと言っても夜店ですね。毎週土曜日、日曜日と鍋横交差点を中心に特に北側の歩道にたくさんの店が並ぶんです。慈眼寺から追分通りの入り口付近まででしたが、子どもの頃にはずいぶん長い距離に思えました。夜店の明かりも電灯ではなく、カーバイトを燃やしたものでガスの臭いがくさかったのを覚えています。食べ物を売るお店が多く、いつも一銭持って行けば楽しめましたね。1銭でだいたいアメ玉2個くらい買えました。特に串カツの揚げたてを壺のソースに入れた時の「ジュー」という音と、

ソースの香ばしい香りは今でも懐かしく頭に残っています。でも、1本の値段が2銭位で自分の小遣いでは買えなくて、親と一緒にの時は買ってもらえるので、それが食べられるという喜びがありました。

「コリントゲーム」というパチンコと似たゲームもよくやりました。玉を入れ、ゴムを弾いて目標に当たると飴や菓子がもらえるのです。そんな楽しみだった夜店も戦争が激しくなり灯火管制のためか開かれなくなりました。

## 強制疎開の話

語り部：寺田留次郎・平成5年談

第二次大戦中、軍が戦車戦をするために、新宿の大ガードから環七までの青梅街道北側奥行き40間(72m)を地図上で線引きし、3日間で立ち退くように命令を出しました。その際、戦時報国特別債券も出しましたが、戦後はただの紙切れになってしまいました。その時、宝仙寺・浅田醤油(国宝級の蔵がいくつもあったため)慈眼寺・中野警察・西町天神などは残されました。

## 鍋横交差点の角から／地下鉄の話

語り部：江藤利雄・平成14年談

先々代が明治時代の中頃「阿波屋」から分家し、現在地(中央3-34)で商売を始めて以来、昭和34年からの地下鉄工事や都電の廃止など、青梅街道の移り変わりを、見たり聞いたりしてきました。

小学生の頃(昭和10年代前半)は比較的国内が安定していて、鍋横は中野銀座と呼ばれるほどに賑やかでした。商店の種類も多く、歩くだけでも楽しかったです。特に鍋横交差点の四つ角は、しゃれた「東京パン」デパートのような「阿波屋呉服店」ガラス食器が並ぶ洋食器屋と、うちの文房具店があり、文化的な雰囲気醸し出していたように思います。

地下鉄「新中野駅」は、当初、杉山公園の下(駅名は南中野)に作る予定でしたが、商店会長だった父親が、鍋横の繁栄のため、駅を商店街側にもってきて駅名も「鍋屋横丁」にしようと誘致に奔走した結果、時の運輸大臣の河野一郎の裁定で、現在の位置、駅名に決定したと聞いています。両方の綱引きのせいかどうか、当初、駅の方角案内板に「鍋屋横丁」といれてもらえず地域で張り紙をした

ものです。昭和37年2月に開通の式典が行われ、その様子が浅田次郎の小説「メトロに乗って」に描写されています。

## 都電廃止の話

鍋屋横丁の交差点近くに都電の停留所がありました。以前は西武鉄道の路面電車だったのですが、その軌道を東京都交通局が買い取り、都電14系統杉並線（新宿⇄荻窪）として運営されていました。当時は利用客も多く便利な交通機関でしたが、昭和37年同じ青梅街道に営団地下鉄荻窪線（現、東京メトロ丸ノ内線）が開通したため、惜しまれながら昭和38年11月に廃止となりました。

語り部：中村清太郎・平成21年談

戦前、西武電車がガードをくぐり東口に通って来るのを見るのが好きでした。それが高じて鉄道写真を撮るのが趣味となり、長年親しんできた都電が今日で最後になると聞いて撮影しました。



廃止の時名残を惜しんで人々が集まり「さらば都電去り行く都電に感謝」の式典が行われました。

## 鍋屋横丁未来への展望



写真中央フレームの中は平成元年（1989年）の鍋横通りです。右側角は富士銀行（現・みずほ銀行）で反対側は本文にも登場した東横喫茶店や道しるべがあった商店街です。正面には旧消防署の望楼が見えます。外側に立ち並ぶビルの風景が、同じ位置からとらえた現在の正式名「鍋屋横丁通り」です。

30年前、未来の提案として発行された「2001 NABEYOKO わがまちグラフィティ」という冊子があります。その中に「輝いている鍋横」というタイトルで当時中学生の少女の作文が載っています。

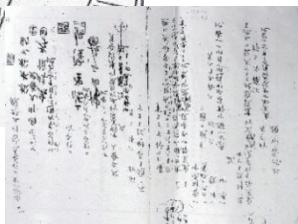
『鍋横ってどんなまち？と聞かれたら、私は何と答えるだろうか』この出だしから始まる文章の最後を「鍋屋横丁未来への展望」と重ね合わせて紹介します。

『だから「二十一世紀の新しいまちづくり」とか、そういうのにこだわらないで、今の鍋横のいいところをいつまでも大切にしていってほしいな、と思っている。みんなが鍋横を心の故郷だっていえるように、今、鍋横が持っている輝きを失わないで前進していってほしいと思っている』

過去から現在、未来と変化する鍋横の最後の「物語」です。



左の地図の円内は昭和24年阿波屋呉服店の当主江藤喜三郎氏が、地域のため中野区に出張所の敷地として使ってほしいと寄贈した土地です。

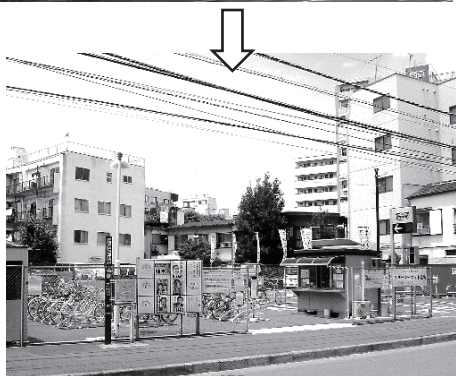


当時の「土地寄付願」の書類です。

現在は区民活動センターの分室「高齢者集会室」として使用されています。



隣接の消防署は昭和8年に木造で建てられ、昭和36年6月に鉄筋に変わりましたが、平成5年7月青梅街道の現在地(中央3-25)に移転となりました。それに伴い都有地から中野区が購入しました。当時の消防署に必ず設置されていた望楼(火の見やぐら)は、昭和49年から廃止の方向になりました。電話の普及と建物の高層化によるものと言われていています。周囲の家から覗かれている様だとの苦情もあったようです。望楼は24時間交代で巡回していましたが、実際は火事の発見よりも、消火後に煙が出ているかなどの確認に「留守番隊」が活用していました



現在は自転車駐輪場となっています。



この土地には鍋横区民活動センターが建設される予定です。

…これからの鍋屋横丁はどのような姿を見せてくれるのでしょうか。



## 発刊によせて（メンバーのひとつ）

■ 東京の三大横丁と言われ江戸時代から繁栄してきた鍋屋横丁。この地に住み鍋横の歴史を紐解く機会に恵まれた事は貴重な経験となりました。三年後は区民活動センターが鍋横の拠点に移転します。移転が新たな歴史の始まりとなり、いつまでも語り継がれていく町であって欲しいと願います。 川井陽子

■ 鍋横物語発行にあたって最も印象に残るのは、PTA 時代に通った東横喫茶店の下に眠る転車台を発掘した事です。仲間と埃まみれになり掘り出した時のあの感激、夫と参加して図面を引いたり転車台とその上に乗るバスの模型作りをした事は今も夫婦の話題となって、良き思い出です。 清水ヒサエ

■ 「集大成を発刊しようと思うので集合！」彦坂代表のひとつ声で久々の観察隊集合となりました。過去の資料を整理中に見つけた古い写真に年月の流れを感じたものの、隊員達の息の合った作業は変わらず健在でした。大勢の方々のご協力で完成したこの鍋横物語を皆様にお届けできるのは嬉しい限りです。 園木紀代子

■ 観察隊の一員であったことで「鍋横のまち」をより知ることができました。鍋横に住んで60年。共に歩んだ思い出がある話などたくさん詰まった冊子が出来あがったことに感謝の思いでいます。この冊子を手にした方々がかつての鍋横を思い浮かべ、また未来への展望を描けることを願っています。 能津恵子

■ 「見たい 聞きたい 記録したい」の総集編が作れないだろうかと前から思っていただけに「鍋横物語」の企画を聞いた時は嬉しかったです。この「鍋横物語」が昭和初期から戦後にかけて中野の中心地として賑わっていた鍋屋横丁の様子を知る貴重な記録として次世代にも伝わることを望んでいます。 守屋啓子

■ 差し込みを使用した図面を小川義之氏のご遺族から寄贈を受けた時に、いつか機会があったら鍋横の昔を知る資料として、地域の皆さんに是非紹介したいと思っていました。そこでこの度の「鍋横物語」を企画し発行するに到りました。この冊子の発行にかかる費用は江藤利雄氏の多大なるご協賛とご賛同いただいたの方々によるものです。ご協力に感謝し厚く御礼申し上げます。 なべよこ観察隊代表 彦坂雅子

文中に登場する語り部（敬称略・五十音順）

会田幸子・天野弘子・新井喜助・安藤幸好・石塚光男・稲子知義  
上島昌之・植野國男・江藤喜久子・江藤達雄・江藤利雄・江藤春雄  
大羽圭子・小川義之・小倉一祐・川井陽子・木口弘・高野允男  
高野マサ・唐沢政次郎・川本正太郎・小林ミツ・小林保雄・小宮哲郎  
桜田悦江・清水ヒサエ・清水喜峰・須藤勝見・高野キヨ子・高橋 厚  
寺田留次郎・中村清太郎・成瀬忠一・成瀬 光・能勢小夜子  
長谷川まつ江・彦坂雅子・肥後正子・深山雄暉・百瀬徳三

※ 長い年月の間には亡くなられた方も含まれています。

#### 参考文献

堀之内妙法寺記  
中野町誌全  
中野区文化の栞  
中野館観桜会・他（フィルム）  
中野区民生活史第1巻  
エポックなかの歴史30選  
なかの史跡ガイド  
2001 NABEYOKO わがまちグラフィティ

※この冊子の印刷代の一部は平成29年度「中野区社会福祉協議会歳末たすけ  
合い募金地域福祉活動助成」によるものです。



## 阿波屋稲荷移設のものがたり

(鍋横物語 9 頁～11 頁「①阿波屋呉服店」・16 頁⑥五柱五成神社 参照)

鍋屋横丁の老舗として有名な阿波屋呉服店の敷地内に祀られていた稲荷は、長い間、江藤家と鍋横地域の守護神となってきました。この度の再開発（2018 年）により移設を余儀なくされ、兄弟稲荷の関係である五柱五成神社の境内にお移りいただきました。

社殿を新調して、2018 年 2 月に鎮座式が、10 月に銘板取り付けの除幕式が行われました。



眷属（動物の形をした神様の使い）のお狐さまも一緒に移り、新調の赤い前垂れが奉納されました。



五柱五成神社



氷川神社の宮司による鎮座式

古くから鍋横のシンボルであった「阿波屋」の名が、ここに残ることになりました。

社殿が新調され新しい銘板のついた阿波屋稲荷

